

---

# 「ようこそ欧洲麦酒カフェへ」

城戸高嶺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ようこそ欧洲麦酒カフェへ」

### 【NZコード】

N1706V

### 【作者名】

城戸高嶺

### 【あらすじ】

ドイツ、ベルギーなどヨーロッパ各国のビールを専門に扱うカフェバーに勤務する私。個性的なスタッフとグルメ、美酒、毎回登場する魅力的なゲストたちとのピチストーリーです。

## グラス6 女優の涙

プロローグ

『よつこい、当店はヨーロッパ各国のビールとおいしいお料理を堪能していただくカフェバーでござります』

そんなふれこみでオープンした欧洲麦酒カフェ。

スタッフは女好きの安倍店長と、こだわりの矢嶋シェフ、そして平凡な私、城戸高嶺。個性的な二人のスタッフに囲まれた上、毎回登場するゲストにも振り回されて・・・

「ねえ城戸ちゃん、今入ってきた人さあ、如月みゆきだよねえ」

「ええ、間違いないと思います。予約の電話を頂いたときもさりげ様つて名乗られていましたから。でもまさかあの大女優の如月みゆきだなんてびっくりしちゃいますよね」

「で、ドリンクは何を注文したの?」

「それがきいたことも無い名前の飲み物だったので・・・お客様によるとトマトジュースとホールを半々に割ったのだって言つんですけど」

「それって、レッドアイだろ」

「Hーっ、やっぱそんな飲み物あつたんですか?」

「何、レッドアイも知らないの?それでなんて答えたの?」

「どうあれ、すかししまつましたって言いました。どちらも材料ありますか?」

「ちょっとお、しつかりしてよね。仮にもうちはビール専門カフHなんだから、ビールベースのカクテルの名前くらい知つておいてよ」

「だつてメニューにそんなカクテルなんか載つて無かつたじゃないですか?」

「まあ、そりあそつだけど・・・」

すると、いつの間に外出から帰つて来たのか、店長阿倍が厨房にいた。

「確かに二十路を過ぎた女がレッドアイも知らないとは情けないが、メニューに載つてなかつたのも事実だ。あまり城戸ばかり責めるな、八嶋」

(みそじとレッドアイは関係ないでしょ?が)

「まあ店長の気持ちもわかりますけど、とにかくネーミングは急いでくださいよ。今回はこの程度で済みましたが、定番ドリンクがメニューに載つてないのはトラブルのもとです・・・つたくオリジナルならともかく、既存のしかも定番カクテルにいまさらなんでネーミングでこだわる必要があるのかなあ・・・」

ぶつぶつといながらシェフ八嶋は冷蔵庫からトマトジュース、レモンなどを取り出してきた。

店長阿倍は全く意に介さぬ様子で、専用の冷蔵庫からビールと冷えたピルスナーグラスを取り出した。

「城戸、今日は俺が作るからしっかり見て覚える。次回から注文が入つたらお前の仕事だぞ」

「は、はい」（えつそつなの？）

「まあ、グラスは」の細長いやつをつかう。もちろんグラスもよくく 冷やす」とだ」

「はい」（なんか緊張する）

「そして始め」トマトジュースをグラスの半分まで注ぐ。順番を間違えるなよ」

「はい」

「ここにレモンの果汁を絞り入れる。やつひとつ・・・こんな具合に。そして最後にビールを注ぐ。トマトジュースの上からでもかやんと泡が立つよう高い位置からしつかり注げ。いいな」

「はい。」（思つたより簡単かも）

「お前、今思つたより簡単かもつて思つただろ？？」

「えつ～どつしてわかつたんですね？」

「顔に書いてあるわ。わかりやすいやつだ」

「そんなん、ひどい・・・」

「いいか、簡単だと思つてなめてかかるんじゃないぞ。レッドアイは奥が深い。注ぐ順番や注ぎ方、ビールの種類で全く別の飲み物に変わるんだ」

「はい、わかりました」

「じゃあお客のところへ運んで来い」

「はーい」

如月みゆきは、店の奥の席でマネージャーらしき男性とテーブルを囲んで座っていた。

なにやらひそひそとはなしていたが、私が近づくとぴたつと会話を止めた。

「お待たせしました。『注文のお品です』

私はレッドアイとourkeをテーブルの上に置くと一礼して立ち去つた。

「だから明日じゅう遅いのよ

背後から押し殺したような怒氣を含んだ女優の声。

「でも如月先生」

「あなた何年私のマネージャーをやつてこりの？記事は明日の朝に

せ出ぬのよ

「はい・・・・」

「記者会見は何が何でも今日中に行います。とにかく早く会場をさがしてちゅうだい、一流のホテルを押さんるのよ」

「わ、わかりました

「すぐ行って」

「はい」

マネージャーはコーヒーもそこそこに席を立ち、会計を済ますと急ぎ足で出て行った。

その後もしばらくの間如月みゆきはその席にたたずんでいた。

「ねえ、城戸ちゃん。あのマネージャー、すいぶんとあわてて出て行つたけど、如月みゆきと何話してたの?」

ショフハ嶋、気になつて仕方がないようだ。店長阿倍はレッドアイを作つたらまたどこかに出かけてしまった。

「あ、よくわかりませんけど、記者会見がどうのひいてしまつた」

「ふうん。やつぱ芸能人はちがつよな」

「でも本当にきれいな人ですね。テレビで見るよりずっと細いし

「確かにそういうのになるとだよねえ」

「ともみえませんね」

「やつぱだんなが若こと違うのかな」

「姐夫みゆきのだんなさんて俳優の伊藤英一ですね」

「やつやう、二十も年下の色男」

「結婚報道された時はすごいぶん話題になりましたよね」

「一流女優と駆け出しじ無名俳優のカップル、目的は金が売名が、なんてね」

「当初は一年も持たないついわれてましたけど」

「結婚してから15年くらいたつよ」

「意外でしたねえ。今じゃ彼のほうが売れてるみたいですし・・・それより八嶋さん、店長、レッディアイに何かこだわりがあるんですね？」

「そりなんだよ。城戸ちゃん、何でも昔付き合った女との悪い出のカクテルらしこよ。僕も詳しいことはよく知らないけど。レッディアイって一日酔いの赤い目のこと意味するらしいんだけどね。ネーミングが気に入らないから他を考えろつていつんだ」

「名前が決まらないからメーラーに載せられなかつたんですね」

「セツコヘ」と。だから城戸ちゃんもなんかいいのないか考えてみてよ」

「そんな急に言われてもちよつと思いつかばないですよ・・・あれ？」

「どうした？」

「如月みゆき、泣いてるみたい」

「カクテルにタバスコ入れすぎたのかな？」

「そんな、子供じゃないんですから・・・」

「城戸ちゃんお水のおかわり持つてよつすみてきたら？」

「ダメですよ、セツとしほこへあづましょい」

確かに女優は肩を震わせ泣いていた。

しばらくすると彼女は私を呼びつけた。そして手にチップを握らせた。

「そんないけません」

「いいからとつておいて。ここ」のレッドアイ、今まで飲んだ中で一番美味しかったわ。どんなビールを使っているのかしら？」

「はい、ビットブルガーピ尔斯でござります。ドイツの最高級ピル

スナーです」

「やあ。・・・」**女優**お店ね。今度は誰かを連れてゆつくりお食事をしに伺つわ

そういうて彼女は店を出て行つた。その表情はほさつきまで泣いていたとは思えない、すがすがしい笑顔だつた。

閉店後。11時30分。

店長阿倍、シェフハ嶋、私の3人はまだ店内にいた。

私は洗つた食器類を片付け、シェフは明日のランチの下ごしらえをし、店長は2杯目のビール

を飲みながらテレビを見ていた。女性アナウンサーの声が聞こえる。

「それでは先ほど行われました、女優如月みゆきさんの離婚記者会見をもう一度、じらんいただきましょう」

私たちはみないつせいにテレビに注目した。

**女優**「えー、私如月みゆきは本日俳優伊藤英一と離婚いたしましたことを<sup>いざな</sup>報告いたします。」

いつせいにフランクシューがたかれた。如月みゆきは正面を見据えてまばたきひとつしない。

記者「やはり伊藤さんの女性関係が原因ですか？」

**女優**「15年前、私たちが結婚するにあたつて、世間の誰もが好奇

の田で私たちを見、一人の仲はそれほど続かないだろうとささやきました。そのとき結婚会見の席上で、私は皆さまにお約束をいたしました。将来彼が一人の男性としてまた俳優として成長を遂げたとき、私の存在が必要ではなくなったと判断したなら、私は潔く身をひく覚悟があると・・・」

記者「つまり伊藤さんにとってもう畠中さんは必要な存在ではないということですか?」

女優「そういうことです」

記者「それは伊藤さんに新しい恋人ができたからということですか?」

女優「そんな単純なことではありません。伊藤の女性問題など今はじまつたことではありませんもの」

記者「ではなぜ今回に限って離婚に発展したのですか?」

女優「彼は男としても俳優としてもすばらしく成長しました。そしてこれからも成長し続けることでしょう。今後彼にはそれなりにふさわしい伴侶が必要となるでしょう。がそれは私ではないということです」

記者たちのしつこい質問攻めにも女優は毅然として答えていた。

「なんか、如月みゆき、かつこいいですね」

私は思わず見とれていった。

「さすが女優だよね、夕方あの席で泣いていたのと同一人物とは思

えない」

八嶋が相槌を打つ。

「そうか、女優が泣いていたのか」と店長。

翌日、写真週刊誌が伊藤英一と新人女優のツーショットをスクープした。記事によると新人女優はすでに妊娠しており引退して今後は専業主婦になるという。

店長「女のプライドってやつか?」

私「女優のプライドもありますよね」

シェフ「わからないでもないけどね。でも、昨日泣いていたのは確かだからね。気丈に振舞っていても本心はつらいんだろうなあ」

店長「おい、一人とも、レッドアイのネーミング決まったぞ」

私とシェフ「何ですか、店長?」

店長「『ティア オブジ アクトレス（女優の涙）』だ」

「ハイい?」このとき初めてシェフ八嶋と私は共感した。

## グラス7 カフェシンドウの裏話

「フロッケンベーカリー」は欧洲ビールカフェと同じ通り沿いに立つ、人気のパン屋さんだ。

ショフハ鳴がいち早くその味の良さに目をつけ、以来食パンやバケットを始め、数々のパンがカフェのランチメニューに欠かせないアイテムとなっている。焼き立てを届けてもらいつづくともあれば、私がお使いに出ることもある。

その日の朝。

カフェの前まで出勤していくと、店から顔なじみの若い女の子が出てきた。

「あっ、おはよう！」やれこめす。副店長さん（< - >）」

ベーカリーでバイトをしてこる、笑うと右のほほにえくぼができるかわいい子。名前は何だったつけ…。

「おはよう、確かフロッケンベーカリーさん…」

「伊藤まさみです。ちゅうど今、焼きたてのマフィンをお店にお届けしたところです」

「それは！」苦労様です。おたくのパンはどれも本当におこしこよね。うちのお客様にも評判いいし」

「ほんとですか？ 嬉しいです（^ ^）」

「またよろしくね（\* ^ ^）♪」

「いらっしゃりこそよろしくお願ひします…。じゃあ私お店に戻りますのでこれで失礼します。どうもありがとうございました」  
彼女は丁寧に頭を下げると人懐こい笑顔を浮かべ、通りをベーカリーに向かって歩いて行つた。

カフェに入るとなんともいえない芳香が店に充満していた。  
シェフハ嶋が焼きたてのマフィンを紅茶で流し込んでいたところだつた。

「おはようございますハ嶋シェフ、すくいにおいでですね」  
「おっ、おはよう城戸ちゃん、今まさみちゃんが焼きたての「王様のマフィン」を届けてくれたんで、試食していただこうなんだ。アチチッ」

シェフハ嶋、すすっていた紅茶のカップから反射的に唇を離した。  
心なしかあわてている様子だ。（まさみちゃんなんて呼んで意外と親しいんだ）

「そうなんですか？ でもコーヒー党のハ嶋シェフが紅茶だなんて珍しいですね」

「コーヒー党ってのは心外だなあ。ヨーロッパ各地を放浪してきた僕としては郷に入れば郷に従えつてのがポリシーだよ。このマフィンにはやっぱ紅茶なんだよなあ。たしづめルピシアのベルエポックかフォションのアールグレイってところが妥当だね」

「さすが、マニアックですね。そのまさみちゃんと今そこであいましたけど、いい子ですね。」

すると急にシェフハ嶋の顔が輝いた。

「でしょ？ 明るくて清楚で… それでいて控えめでさあ、いまどきなかなかないよね、あいづ子」

なんだか目が潤んでる。シンクにはもうひとつつの飲み終えた紅茶力

ツプが下げる。

ハハーン、なるほどね・・・と心でつぶやいた。

「な、何だよ、城戸ちゃん。気味悪い笑顔して」

「イヒ、別に・・・」（せっぱ私つて考へてること）が顔に出ちゃう（んだ）

その日のBランチはすごい好評だった。

フライした白身の魚（この日は鱈）をシェフ特性のタルタルソースに絡め、たっぷりのお野菜とともにマフィンでサンドしたシェフ渾身の自信作、FBスペシャル。（シェフのネーミング・・・フィッシュを使つたBランチの意味。イギリスのフィッシュ&ベッドにかけているらしい）

パスタ系のAランチと違い、軽いパンがメインのBランチはお昼時を過ぎてもオーダーが入る。

「王様のマフィンあと2個しか残つてませんね。シェフ、私フロッケンベーカリーまで買いに行つてしましょうか？」

「いや、これでやめておこう。あと2個しか残つていない、言い換えれば2個も残つているんだ。SOLD OUT=売り切れというのはチャンスロスという危険もはらんでいるけど食べ損ねたお客様にとっては想像以上の付加価値を持つからね。次回の購買意欲につながるんだよ。だから今日のところは残り2つのマフィンを閉店までにこそこそく方向で考えよう」「うよ

「わかりました・・・でも八嶋シユフって結構分析脳力あるんですね

「アハハ、正直言つと今のは店長の受け売りだよ。ヨーロッパを放

浪している時、ひょんなことから店長と知り合つてね。当時の僕は皿洗いのバイトしながら各地を歩き回る貧乏学生でさ。店長は親父さんの会社に入つて世界各国のホテルで修行の身だったのさ。そのとき店長からはいろいろ教わったんだ

すると背後から聞きたれた低い声がした。

「そんなこともあつたな」

「あ、店長おかえりなさい」（ホント、いつもながら神出鬼没な人だ）

「お客様を連れてきたぞ」

そして手で押されたドアのむこうに向かつて「君たち入つてきたまえ」といった。

すると女子高生が4人、きょろきょろしながら入つてきた。皆近くの女子大付属の制服を着ている。何人かは地元のタウン誌を胸に抱えていた。

少女A「なんか記事で見たよりお店狭いね」

少女B「でもなかなかこじやれてるジャン」

すると少女C、厨房のシェフハ嶋を指差した。

「あれ、写真にでたシェフじゃない？」

少女AとB「マジイ？本物のほうがかつによくね？」

少女C「やっぱいよ、店長もいけてるけどあたしあのシェフ、マジ好みかも」

少女A「あたしはやっぱ店長かなあ、背え高いしい」

少女B「あれ、店長は？」

そういうえば店長、彼女たちを店に呼び込んだとたんに姿を消していった。

(やれやれ店長またいなくなつたんだ。それにしてもこの子たち記事とか写真でいつてるけどなんのことかしら…)

そういえば2ヶ月ほど前、地元のタウン誌の記者が来て、カフェとランチメニューの紹介をする記事を書きたいといって取材していったことがあった。女性の記者はインタビューと撮影を一人でこなし、2時間ほどで引き上げていった。

あの時は開店してまだ間もなく、私たちスタッフもあたふたしていたので、その後取材のことなどすっかり忘れていた。

少女たちはタウン誌を手にこの店の前にいるところを、外出から戻ってきた店長に声をかけられ、店に入ってきたらしい。

4人はカウンターに近い席に座るとメニューを取り上げた。

「あのう、Bランチつてまだありますか?」と少女A。

「(めんなさい、今日は特に好評あと2人分しか残つてないの・・・・・あの、もしよろしかつたらシェフお勧めのベルギー風パンケーキはいかがですか?」

勧める私に、入店以来ただ一人一言も発していなかつた少女Dが遠慮がちに口を開いた。

「あ、私のシェフお勧めのパンケーキいただきたいです」

するとすっかり気をよくしたシェフハ嶋、

「君たちせつかく4人できてくれたんだから、パンケーキとBランチ2つづつにしてシェアして食べたら?」

と提案した。

結局4人の少女たちは水とおしゃべりですごした。ただ店を出るとき、一番無口だった少女Dだけは厨房のシェフに向かつて、「とてもおいしかつたです」と丁寧に頭を下げていった。

翌日。

ようやくランチタイムの忙しさから開放されてのんびりしていふど。

昨日の女子高生のうちの一人が入ってきた。一番控えめな少女Dだ。

「いらっしゃいませ。今日は一人?」

「はい、シェフのベルギー風パンケーキがあんまりおいしかったものですから、また食べたくなっちゃって……あの、まだありますか?」

少女は小さな声で恥ずかしそうに上目遣いで私を見た。

すると厨房からシェフハ嶋が気がついて、

「やあ、いらっしゃい。パンケーキはいつでもOKだよ。すぐ焼くから待つてね」

と声をかけた。

少女は顔を紅潮させてコクリとうなづいた。

「今お水持つてくるね、どこでも好きなところ座つていよいよ」

すると少女は迷わずカウンターに行き、厨房が一番よく見渡せる真ん中の席に腰を落ち着けた。

(この子恥ずかしがり屋のわりにストレートに自分を表現するタイプなんだ)

厨房はカウンターの奥にある。間仕切りはないが、下がり壁になつていてその下はちょうど対面式キッチンのように、調理台やガス台、シンクがあり、カウンターのお客からはシェフの声も動きも丸見えになる。少女が座ったカウンターの中央は、厨房の壁際の「の字型の作業台まで見渡せた。

少女Dはシェフがパンケーキを焼く間、じつとその様子を見ていた。パンケーキが具されると静かにそれを食べた。食べ終わるとまた厨房で作業するシェフの姿を見つめていた。1時間ほどそんな風に過ごした後、昨日と同じように「とてもおいしかったです」といつて頭を下げる帰つていった。

「なんかシェフに熱い視線送つてましたね」

「よしてよ城戸ちゃん、まだ高校生だよ」

「いまだき高校生つていつたら立派に女ですよ」

「僕は基本的にガキには興味ないの。どちらかといえば大人の女性のほうがいいよ。若くてもせいぜい23・4はいつてないと女とはみなせないな」

「ベーカリーの伊藤まさみちゃんとかですね」

「何だよ、やぶからぼうに」

シェフが珍しく顔を赤らめた。

「八嶋さん見てたらわかりますよ。でも彼女とだつたらお似合いだと思いますよ」

「そ、そうかい？」

シェフ、すじくうれしそうだ。

「ハイ、仲良くしてるみたいじゃないですか。今朝も一緒に紅茶飲んでいたんでしょう？」

「アハ、城戸ちゃんも人が悪いな。焼き立てマフィンを届けてくれるといい食べなくなつちゃつてさ。はじめは『コーヒーで食べてたんだけど、まさみちゃんが紅茶のほうが合つからつてあるときティーバックを数種類持つててくれたんだよ。あの子紅茶には結構詳しいみたいで』

「それから配達のたびにまさみちゃんとお茶するよつになつたんですね」

「ま、まあそんなところかな」

「なるほど、それで最近では本格的な茶葉や機材にティーカップまで揃えたわけですか」

「別にまさみちゃんのためとこつわけではないぜ」

「わかつてますよ、でも・・・」

「え？」

「八嶋さん、確かわたしより2つくらい年上でしたよね」

「うん、それがどうしたの？」

「ということは今34歳。まさみちゃんは確か24歳。もしショフが本気で彼女と付き合いたいなら」」ひどつ思い切つた行動に出たほうがいいですよ」

「思い切つた行動つて……」

「デートに誘っちゃうんですよ」

「デートかあ。しかしきなり誘つてもなんか唐突だよなあ……」

・

するといつの間に帰つてきたのか店長安倍がが口を挟んだ。

「映画のチケットが手に入つたから一緒に行かないかと誘つてのはどうだ？」話題作なら無難だし誘われたほつものりやすいだろ？

「なるほど、古典的な手ですが、今のシェフとまさみちゃんの関係を考えると、一番自然な誘いかたですね」と私。

シェフ八嶋は俄然やる気が出てきたらしい。

「よーし早速ネットでチケット2枚手に入れよ！」

翌日の昼下がり。

例の少女Dはまたやつてきてパンケーキを注文した。

いつもどおりカウンターの中央に座り、待つている間も、食べ終わつてからもじつとシェフを見つめている。どうやらこの子、本氣でシェフ八嶋に恋しちゃつたらしい。

しかし肝心のシェフは心ここにあらずであった。

手に入れたチケットを、明日まさみちゃんに渡すことで頭がいつぱいなのだ。

少女Dの送る熱い視線などまったく気づかない。

「八嶋さん、早く明日の朝が来るといいですね」  
からかうようにわたし、シェフの耳元で囁いた。

と、怒氣を含んだ少女の視線がわたしを刺してきた。

(しまつた、この子に恨まれちゃう)

恋する乙女にとって、彼に近づく女はにつく敵なのだ。

すると少女は立ち上がり、

「あのう、ハ嶋さんちょっとお願ひがあるんですけど・・・」

といつてかばんからチケットを取り出した。

「公開中の『パイレーツオブカリビアン』友達に譲つてもらったんですけど、一緒に見に行きませんか？」

きょとんとしていたシェフハ嶋はそのまま凍りついてしまった。彼もまた同じ映画のチケットを入手していたのだ。

「あの・・・悪いんだけど僕その映画、この前友たちと観に行っちゃったんなんだよね」

「えーっ、そうなんですか？」

少女は心底がっかりしたようだった。

「じゃあ・・・帰ります」

そしてそのままかばんを持つてレジに向かった。

すると突然お店の扉が開いてお客様が一人飛び込んできた。

「いらっしゃい・・・あれ、まさみちゃん、配達は確か明日よね」  
わたしの声にすぐ反応してシェフハ嶋が厨房から出てきた。

「やあ、まさみちゃん、こんな時間にめずらしいね」

「休憩時間なんです。30分だけですけど、一度話題のベルギー風

パンケーキを食べたくて・・・」

「了解。すぐ焼くからそこに座つて待つてね」

シェフはまさみちゃんとカウンターの中央の席、つまり今まで少女Dが座つていたところをすすめた。

少女の怒氣を含んだ視線が今度はまさみちゃんに向かった。

何も知らないまさみちやんは、メニューを繰りながら楽しそうにリンクを選んでいる。

「ねえハ嶋さん、そのパンケーキには何を飲んだら合いますか？」

「僕個人としてはベルギービールのロミーピルスをオレンジジュー  
スで割る、オリジナルのビアカクテル『オレンジ サンセット』が  
お勧めなんだけど、勤務中だからアルコールはダメだよね。まさみ  
ちゃんは紅茶党だから、ルピシアのフレーバードティをアイスでつ  
くつとあげよ?」

「わあ、うれしいな  
無邪気に喜ぶまさみちやんと、でれでれしているショフハ嶋。  
いつものわたしなら、一緒に喜んでむしろ一人をあおるとこりだ。  
しかしそうでに少女Dの怒りは頂点に達している。

「やつじえば、ハ嶋さん、映画って好きですか?」

するとまさみちやんはベーカリーのHプロンのポケットからチケットを取り出した。

「実はさつきお密さんから『パイレーツオブカリビアン』のチケッ  
トいただいたやつて・・・よかつたら一緒にどうかなつて」

すると少女D猛然とカウンターに歩み寄ってきた。肩で息をしながら明るかに興奮している。そしてぴたりとまさみちやんの前で止ま  
った。

「残念ですけどシフは先週この映画見ちやつたんですけど、ね、

ハ嶋さん

きつとハ嶋をにらむ。

「え? ああ、うんまあ・・・」

あいまいに答えるシフハ嶋の困った顔。

再び少女はまさみちゃんを見て呼吸が落ち着くのを待つた。

「じゃあわたし帰ります。」<sup>レ</sup>馳走様でした。」

少女Dは心なしかいつもより乱暴にお金をレジカウンターに置くと、そのまま店を出て行った。

「なんかさつきの子、八嶋さんのこと好きみたい」

パンケーキをアイスティで流し込みながらまさみちゃんがポツリと  
いった。

「そんなんじゃないよ、ただうちのパンケーキが氣に入ったみたい  
で・・・」

「うふ。八嶋さんもてるんですね。でもホントにこのパンケーキお  
いしいです。」<sup>レ</sup>ひさまでした

まさみちゃんはお会計を済ますと、時計を気にしながら帰つて行つ  
た。

「どうして後からでもホントのことまさみちゃんこいわなかつたん  
ですか?せつかくのチャンスだつたのに」

「あの高校生の子にうかついて断つたあとだぜ。こへりなんでもそ  
んなことできないよ」

「シーフって店長と違つてしまじめなんですね」

少し歯がゆい気がした。シーフの顔は後悔と苦痛にゆがんでいた。

翌朝力フHに出勤すると、店内は例のマフィンの焼きたての香りが  
満ちていた。

「まさみちゃんもう帰つたんですか?」

するとシーフ八嶋、とても低いテンションで

「今日はパートのおばちゃんが来た」

「えつどつして・・・?」

「まさみちゃん、就職が決まつたんだつて」

「就職?」

「大学卒業した後就職浪人で、バイトしながら就活してたらしいんだけど、昨日突然採用が決まつたらしい。中途採用だから今日から早速出社なんだつて」

「なんだか急な話ですね」

「こんなことなら一緒に『パイレーツオブカリビアン』観にいけばよかつたよ・・・」

「八嶋さん、そんな落ち込まないでくださいよ。たまたまタイミングが悪かつただけですよ」

すると突然事務所の扉が開き、中から店長が現れた。どうせ朝方帰つてきて、事務所のソファで寝ていたのだろう。大きくあぐびをしながら、

「そのタイミングつてのが大事なんだ。スタートでタイミングがずれるようなら、所詮その恋はうまくは行かない。八嶋、そのままみちゃんとは縁がなかつたと思って諦めるんだな。お前ならまたいい女が現れるさ」といった。

「ええ・・・そうします。もともと僕は若い子より、ちょっと大人の女性が好みだし」「（この人意外と立ち直り早いかも・・・）

こうしてシェフハ嶋の恋が始まる前に終わつた。

同時に少女Dの短い片思いも終わつた。少女はそれきりカフェには来なかつた。

シェフハ嶋はまた「一ヒー党に戻つた。

「ねえハ嶋さん、いつかまさみちゃんに飲ませたいっていつてたシエフオリジナルのビアカクテルなんていいましたつけ？」

「ああ、『オレンジ サンセット』ね」

「オレンジのたそがれが日に浮かぶよつな素敵なネーミングですね」

「ありがと。アルコールが苦手な女の子や、おやつのときにはスイーツと一緒に飲めるビールがほしいと思つて作つてみたんだ。飲んでみるかい？」

「はい、ぜひ！」

そしてシェフは生のオレンジをピ尔斯ナーグラスに絞つていれ、さらにベルギービールのロミーピルスをその上に注いで軽くステアした。グラスのふちには厚く切つたオレンジのスライスをおしゃれに飾つてわたしに差し出した。

はじめにオレンジの爽やかな甘みと酸味。続いてかすかに感じるアブリコットの香り。そしてホップの苦味がついてくる。そしてロミーピルス特有の纖細でやわらかい舌触り。それらが渾然一体となつてのどを通りしていく。

「すじくおこし」 こんなのは初めてです。それにこのビール、まるでベルベットのようになめらか…」

「気に入った？」

「ハイ、切ない恋の味がします（^\_\_^）ゞ」

「それを言つなつて（^\_\_^）」

## グラス8 女主任登場

「本日よつづちの経理を担当することになった、本社経理課主任の片桐若葉君だ。よろしく頼む」

店長安倍の紹介を受け、傍らの女性はにこりともせず頭を下げた。ウエーブのかかった髪はセミロングで、きりっとした顔立ちに黒いふちのメガネをかけている。

年は40を過ぎたくらい。薄い唇と高い鼻。一重まぶたの瞳から発せられる光は鋭く、女性にしては大柄で、長身の店長と並んでいても頭ひとつほども差がない。

「では片桐君、一言挨拶を」

店長に促されると、彼女はシェフの八嶋と私を交互にみすえてから、おもむろに口を開いた。

「入社して20年。5年前に本社の総務部に異動し、昨年より経理課の主任として勤務。私のことは片桐主任と呼ぶよつて

店長安倍が大きく咳払いをした。

「えー彼女は小売や営業の経験も豊富だし、接客マナーも完璧だ。総務に移つてからは事務でも手腕を發揮している。まあ、みんな仲良くやってくれ」

早速シェフ八嶋、

「なんだか、おつかなそうなおばさんだね、城戸ちゃん  
私の耳元に近づいて囁いた。

すると彼女の鋭い目が八嶋をにらみつけた。

「八嶋シェフ、何か?」

思わず心臓がドクンと大きく波打つた。私はこうこう状況が苦手だ。

なのに八嶋は

「いえ・・・本社の經理の方が来られていきなり偉そうに言われても、僕としては違和感感じますね。入社何年だか知りませんけど、うちの歐州麦酒カフェでは新参者なわけだし・・・。始めの挨拶くらいもつと謙虚にしたほうがいいんじゃないですかね」  
ビビッている私とは対象的にやけに毅然としている。

片桐主任は彼をにらみつけたままだ。

一触即発の空氣。

主任の片桐、しばしの間まじまじと八嶋を見下ろしていたが、「なるほど、あんたの言つこと筋通つてるわ、八島シェフ。大変失礼しました。これからよろしくお願ひします」といつて深々と頭を下げた。

毒氣を抜かれた形の八嶋だが、すぐに氣を取り直して「イエ、僕こそよろしく頼みます」と頭を下げた。

(この展開つて・・・?)

「あ、あのう・・・私城戸高嶺です。一応副店長もつてます・・・つてかたちだけですけど」  
恐る恐るいうと片桐主任、今度は私をにらんだ。

「ふん、そうみたいだね」

そして私の耳元に顔を近づけて

「まつ、女は女同士、仲良くやりましょ」

わざやくよつてこつと、一ツと白い歯をのぞかせ初めて笑顔をみせた。

(つづ)

気持ちとは反対に精一杯の笑顔を作る私。

偉そうかと思えば謙虚、こわいかと思えばちょっとやさしこ。なんだかよくわからない人だ。

お店の開店と同時にランチタイムが始まった。

片桐主任はじめ店長と事務室のパソコンで帳簿をチェックしていったが、店が混みだすとエプロンをして接客を始めた。

そして彼女は数分と立たぬうちに頭角を現した。

鮮やかな客さばき、電話の応対。メニューは全て頭に入っているし、ヨーロッパビールの知識も豊富だ。

私は彼女の仕事ぶりと勢いにただ圧倒されていた。

あわただしい時間が過ぎ、少し落ちついた。

洗うためのお皿をシンクの横に積み上げていると、片桐主任が一番上の皿に残ったパスタソースを指ですくい取つてぺろりと舐めた。

「・・・ふつん、御曹司が見込んだだけあってハ嶋シェフ、腕はたしかみたいね」

(御曹司だなんて、このひと店長のことどう呼ぶんだ・・・)

「片桐主任でなんでもできちゃつんですね」と私。

「まあね」

そしてちらりと私を見ていった。

「あんたさあ、本社のネット通販部から異動してきたんだって？入社何年目？」

「3年です・・・中途採用ですけど」

「つてことは会社のホームページとかあんたも製作してたの？」

「いえ、私はネットで注文受けたり商品を梱包して発送したりするくらいで・・・ホームページの製作は平川係長に任せきりでした」

「ふうん・・・」

片桐主任は改めて私を直踏みするようじろりと一瞥をくれた。  
しかしすぐ興味を失ったのか視線をそらし、キッチン用具の収められた棚に手を伸ばして包丁をとった。

「ねえ八嶋シェフ、このたまねぎみじん切りにしておくよ

「いいですよ、片桐主任。僕の仕事だし・・・だいたい素人に僕のキッチン道具使ってほしくないし」

「大丈夫、あたし調理師免許持つてんの、それに道具触らせたくないなら明日からはマイ包丁持つてくるから。それよりそっちの特性パスタソースはあんたしか出せない味でしょ。ただでさえ人手不足なんだから、効率よく動こううじやない」

そういうつて片桐主任は鮮やかな手つきで瞬く間にたまねぎをみじん切りにしていった。

するとシェフ、あつやうと「じゃあ片桐主任にお願いしようかな」と素直にいった。

驚きだ、私にはおたまひとつ触らせないのに。

「じ、じゃあ私も皿洗います」

なんだかあせつてきた。このままじゃ私の居場所がなくなってしまいそうだ。

夕方。

店が忙しくなつてくると片桐主任は接客だけではなく、厨房でもシェフハ嶋をフォローしたりして、私の3倍くらい働いた。

驚いたことに外国人観光客らしいグループが入つてきたときは、英語でペラペラサービスをしていた。

日本語以外まったく話せない私は、今までこういう状況の時にはシェフか店長に任せっぱなしだったのだ。二人とも海外生活の経験があるので英語は堪能だし、特にシェフはイタリア、フランス、スペイン語が話せるらしい。

「片桐主任も海外生活とか経験があるんですか？」

一息ついたとき思わず彼女に聞いてみた。

「ない。ただあたし英検準一級もつてるの。あとトーアイックはこの前680点とつたから」「うーん」とつぶやく。

そして驚いている私の耳元でさらに囁くようにいった。

「朝の自己紹介のとき言つの忘れたんだけどさ、あたし趣味は韓流ドラマと資格取りだから」

「はい？」

数日後の昼下がり。カフェには店長安倍、シェフハ嶋、そして私の

3人。

片桐主任はまだ来ていない。彼女はいつも誰よりも遅く出勤そしていち早く早く帰る。店に立つこともあれば事務所にこもってパソコンしているだけのこともある。

そろそろランチタイムもピークになるがまだ姿を現していない。

店長によると、片桐主任は本社付けなので、毎朝本社に出勤してからひばりに来る。カフェを出るとまた社に戻ることもあるらしい。

彼女のカフェでの任務は、店の手伝いと売り上げ向上、そしてスタッフ教育の徹底らしい。

「給料も本社から出ているから、何時間働いても一切人件費はかからない。だからうちとしては大いに利用できる」と店長安倍はいう。確かにあれだけの能力で人件費は本社もちなカフェとしてはおいしい話なのだろう。

「でも彼女、調理のセンスといい、味覚の鋭さといい、よく勉強しているのは確かだよ」

シェフハ島が珍しく冷静に人を褒めた。

「英語もペラペラで外国のお客様のとき、今までは店長やシェフに頼っていたのに、すごく助かっています。」と私。

「あいつは昔から資格マニアで、そのほとんどを通信教育で取得しているんだ」と店長。

「海外旅行の経験無いのになんに流暢にしゃべれるのってすごいですね」と私。

するとシェフハ嶋、メガネの眉間の上辺りを軽く押さえ、「まあ、彼女のはアメリカンイングリッシュユとしてパーフェクトだね」と含みのあるいい方。

「ハニカムですか？」

「僕や店長のはクイーンズイングリッシュだから、つばが飛ぶようなアメリカンと違つて発音が上品なのさ」

「そういうもんですか・・・私にはさっぱりわかりません」

すると店長安倍が私に向かって  
「オイ、お前は何か資格とか持つてないのか?」  
と聞いてきた。

「すみません、小学校のとき通っていたソロバン教室で6級もひつたくらいで、後は何も・・・」「

ちょうどそのとき正桐主任が厨房にある裏口から入ってきた。

3人がいつせいに注目する。

「なに？」

首を傾げてから片桐主任はいつも通勤用のバッグともうひとつ、紙袋を持つて事務所に入つていった。入り際店長に向かつて「ちょっとみんなに話しておきたい」とがあるので、あとで時間つくれくんない?」

午後3時50分。店内が一息ついた時、店長が集合をかけ私たちスタッフはカウンターの隅に集まつた。

そこへ片桐主任が口火を切つた。

「ここ数日、この欧州麦酒カフェで働かせてもらつて、店の運営や経理の状況を見させてもらった。それで改善策をまとめてきたの」

「そうか、片桐。では報告してくれ」と店長。

「経費で節約できる点がいくつある。反論もあるだらうけどとにかく聞いて。まずランチなどの材料費だけど仕入れコストをもう少し下げたいの。レシートを見るとほとんどの食材を伊勢屋スーパーで仕入れてるけど」

そう、シェフ八嶋が書き出したリストを持つて、いつも私が買い物に行くスーパーだ。

「あそこは有機野菜を扱つているし、ほかの食材も安全でクオリティーが高い。少々値ははるけど、僕は料理人として食材だけは譲れないつすね」

シェフ八嶋、例のごとく鼻息が荒い。

すると片桐主任めがねの奥からシェフをにらんだ。

「有機野菜はいいとして、ほかはスーパーマルミヤでいいんじゃないの?調べたけど調味料などの品揃えはマルミヤのほうが豊富だし、全体的に1割近く安い」

するとシェフ腕を組みなおして、

「まあ、城戸ちゃんには買い物の負担がかかるけど、主任がそういうなら……」

とじぶじぶついた。

「あ、私ならぜんぜんかまわないです」

「それから光熱費をもつと抑えたいの。お皿を洗うとき流水の量に気をつける」と。それから今月中に店の照明はすべてLEDに換える。Hアコンと冷蔵庫の設定温度を一度上げる「などなど・・・片桐主任の支持が続いた。

どれも少し気をつければ実行できる」ばかりだったのでも、皆従つてした。

「最後にあとひとつだけ」と片桐主任。

「いい加減にしてくださいよ、そろそろ夜の仕込みに入らな」と「いざやりしたよ」とショフがいった。

「Bランチでよく使つてるパン類のことなんだけど。あれベーカリーで買つのはもつたいたいからつちで焼いたらどう?」

するとショフ八嶋

「それ無理ですよ、僕も世界中で食べ歩いてきたけど、あれのマフィンはハンパ無いっすから」

「そのマフィンのことなんだけどや」

といつて片桐主任は持参した紙袋から「」と皿に包みを出して見せた。

中から見覚えのあるマフィンがいくつも出された。

「みんなちょっと食べてみてよ」と主任。

「これってフロッケンベーカリーの「王様のマフィン」ですよね  
わたしにとつておなじみのアイテムだ。  
シェフハ嶋も店長も大きくなづく。

「これあたしが焼いたの」と片桐主任。

一同が「えーっ?」と驚くのをじつかり見届けてから主任は鼻を一瞬膨らませた。

「確かにあそこはおいしいけど、ちょっと高いでしょ?だから何回か買って家でもまねして作って見た。さすがに手ごわかつたけど、やっと今日うまく行つたというわけ」

「さすがだな、片桐、これならうちの店に出せんぞ」と店長安倍。

「じゃあ、もうフロッケンベーカリーでは仕入れないんですか?」  
いいながら私の視線は無意識にシェフハ嶋を追つている。

「まあとりあえず」「王様のマフィン」に関してはそつだな、追々品  
数を増やしていくすれば全部自前にしていい」と店長。

「僕も新作メニュー考えてみよう」

シェフハ嶋、フロッケンベーカリーのバイトだった、伊藤まさみち  
やんのことは吹っ切れているらしい。

3日後。閉店後のカフェで。

オリジナルマフィンを使ったシェフの、新作メニューの試食をする  
ことになった。

スタッフは店長安倍、シェフハ嶋、片桐主任と私の4人。

ビールは店長の支持通り、あらかじめ5度に冷やしてある。パウエル・クワック。ベルギービールだ。

深い琥珀色でアルコールは8・4度とやや高め。飲み口はやせこいがのど越しはガツンとくるおいしさ。

ショフが「皆さんお待ちどう様」といつて登場したのはやや小ぶりのトーストしたマフィンのサンドイッチ。

「カンパニー！頂きまーす」空腹の一回はこつせこにマフィンにかぶりつく。

その瞬間口いっぱいに広がるミラクル。異なるチーズの個性がカリカリにトーストしたマフィンの中で溶け合い、口中で渾然一体となつてさらにも奥深い味わいをかもし出している。

すでに涙田の私「熱々でカリカリのマフィンの中から2つの違った食感。たまりません」

八嶋のうんちくがはじまる。「ハードなチエダーと、なめらかなスタイルトンという2つのチーズが決め手なんだ。特にスタイルトンはエリザベス女王の好物というブルーチーズ、バターのようじょう？」

今田はアーモンドやピスタチオなどナッツ類を碎いて一緒にほさんでいるけど、ドライフルーツもいけるんじゃないかな、いかがつか、店長？

「早速ランチメニューにしていいぞ、八嶋」

「それならこのレシピのネーミング考えなくちゃ」と私。

「あ、それならもう決めてある」と片桐主任。

「え？何ですか？教えてください」

「クイーンズマフィン」よ。店長とシェフの完璧なイギリス英語に敬意をこめてね」

片桐主任は肩をすくめ、ニッとした笑って見せた。

(うつ)

これにはシェフも苦笑いした。

店長が2本目のパウウェル クワックをもつて立ち上がった。

「あらためて乾杯だ。片桐君の歓迎と新作メニューの完成を祝つて

乾杯！」

一同「乾杯」

そして「よつこそ欧洲麦酒カフェへ、片桐主任！」

## グラス9 マダムたちの午後

### プロローグ

「ゴーチ、私のことなら気にしないでください。私のせいでも迷惑をかけるようなことになつたら申し訳なくて・・・私はいつでも身を引く覚悟ですから」

「あなたが心配することじやない。僕がふがいなばかりにかえつてすみません。、彼女たちとはもう一度話し合つて分かつてもうつもりです。だからもう少し辛抱してほしい」

一日目。昼下がり。

カフェ店内の中央にある橢円形のテーブルは、10名前後が着席でいる、店のメインステージ。

その日囲んでいたのは華やかなマダムたち。

カジュアルな服装だが身につけているのはどれも高級品ばかり。それもそのはず、彼女たちはこのすぐ先にある高級テニスクラブの会員だ。入会金が驚くほど高額で有名なそのクラブ・・・通つてくれるはお金持ちのセレブばかり。カフェの彼女たちも皆華やかで美しい。

中でもひときわ輝いているのは芳川婦人。飛び切り美人な上、服装のセンスも抜群だ。

皆が彼女に憧憬と敬意を持つて接しているのがわかる。

「でも芳川様、今日のプレイも冴えていらしたわ。」

「本当。立て続けに3本もサービスエースお出しになるんですもの。」

思わずあのコーチが芳川様にガツツポーズ送つてたの見てなんかやけちゃつたわ」

マダムたちは皆口々に褒め言葉を投げかけるが、芳川婦人はツェラタール・ヴァイスを飲みながら悠然と構えていた。

「そういえば西田さん、少しあお慣れになつて？最近ストロークが安定してきたようだけど」

「とんでもないですわ、芳川様。私なんて入会したばかりで、まだまだです」

芳川夫人に名指しで褒められ、西田夫人は頬を紅潮させた。  
ほかのマダムたちの羨望のまなざしがいっせいに彼女に向かう。  
マリーアントワネットの取り巻きのように、誰もが芳川夫人に声をかけてもらうのを待つてているのだ。

ただ一人をのぞいては・・・。

黒木夫人は芳川夫人から一番遠い席に座つていた。  
こちらも芳川夫人に負けないくらい美貌の持ち主だ。しかもずっと若い。

しかし彼女、近くのご婦人方から話しかけられるまま、相槌を打つてはいたが上の空。その目は一人の女性を凝視していた。

そこに現れたのがうわさのイケメンテニスボーリー。  
マダム一同の視線がいっせいに彼に集中する。

「コーチつたら遅いじゃない」

「すみません。ほかのグループに呼び止められちゃつて」

イケメンコーチはさわやかな笑顔で迷わず芳川婦人の隣に座つた。

そう。テーブルの上席に座つた芳川婦人の右側は、お約束どおり空

席になつていたのだ・・・。

それからマダムたちとイケメンはひとしきり盛り上がり、瞬く間に時は過ぎた。

「あらもうこんな時間、お買い物して帰らなくちゃ」

一人のマダムが切り出すと、皆いつせいに時計を見て帰宅モードになつた。

「では皆さん、来月の団体戦に向けてがんばりましょうね。私とコチははまだ少し打ち合わせをしていくから、皆さんお先にどうぞ。支払いはご心配なく」

例によつて芳川婦人の一言でお開きとなり、めいめいが席を立つ。

「いつも」馳走様です。芳川様、コチ、また来週」

「芳川様、コチ、お一人とも」きげんよう

一人また一人と夫人とイケメンに愛想をふつて出て行つた。  
黒木夫人はいつ出て行つたのか、とうに姿は無かつた。

テーブルに残つた芳川夫人とイケメンコチ。

夫人はシニヨンをほどいてロングヘアを肩までなびかせた。

「たまには私のマンショնに寄つていかない、タクヤ?」

「いや、今日は疲れたから遠慮するよ」

「じゃあビールを一杯付き合つてくれる?」

「あなただけ飲んだらいい。僕は車だからマンショնまで送るよ」

そして芳川夫人は再びオーストリアビールツェラター ヴァイス

を注文した。

翌日の夜。

店内の片隅で人目を忍ぶ一組のカップル。  
男は例のイケメン「一チ。でもお相手は別の人。  
あの黒木夫人だ。

「昨日はどういうことよタクヤ？ あんな女の『機嫌ばつかり』って  
『そういう言い方はやめろよ、仮にも・・・』  
『ああもうたくさん、タクヤにはうんざりするわ、みんなにいい顔  
するのよね』

「たまたまこうして同じテニスクラブで出会ったんだぜ、いがみ合  
つてないで仲良くやつてくれよ」

「そろはいくもんですか、こうなつたらとことん納得のいくまで食  
下がつてやる」

「どうすんだよ」

「あの女と対決するのよ。タクヤ、明日ここへつれてきて」

翌日深夜。店のいちばん奥のテーブルに座つた3人。

口火を切つたのは一番興奮気味の黒田夫人。

「それでタクヤ、結論はでたの？」

「それがその・・・」口にいる「一チ。

「まあまあ、ひななちゃん、落ち着きなさい。あなたも人妻で一児  
の母なのよ」

いつもらしからぬ様子の芳川婦人。

「それとダブルスのペアは関係ないでしょう、何で今度の大会で私

「があんな初心者とペアを組まなきゃなんないのよ」

「わがまま言わないでちょうどいい、私たちはプロじゃないのよ。試合に勝つことよりまずはチームメイトの和が大切な、それなのにひななつたら自分のことばかりいって・・・」

「何よ私ばかり悪者にするのね、自分はカリスマ主婦テニスプレイヤーを気取っているんでしょうけど」

たまりかねてイケメンコーチが口をはさんだ。

「お袋も姉貴もいいかげんにしろよ。そもそもあんたたちの『ペア』はペアのいれかわりだつたんだよね。姉貴はお袋と一緒に今まで数々のメダルを取つてきたからいまさらコンビの解消はしたくない、でもクラブの古株でチームのまとめ役のお袋にしてみたら、会員の気持ちをつないでおくためにもペアのメンバーの入れ替えは定期的にしておきたい」

「だからってようによつてあのド素人の西田夫人と私がペアを組めだなんてひどすぎるわよ・ママ」

「でもあの子ホントに素質があるのよ。ひななちゃんみたいなセンスのいい子と組めば絶対お互いが伸びると思ったから・・・」

「俺も西田さんの素質には一目置いていたんだ。だからお袋から姉貴と西田さんの『コンビ』の話を聞いたときには、悪くない話だと思ったよ」

「あら、そういうことだったの」

やつと納得いったのか黒田夫人、少し顔つきが穏やかになった。

「でももつ遅いんだ。今回のこととで西田夫人すっかり参っちゃってさ、数日前、ロッカールームで呼び止められて言われちゃったよ、このクラブやめるってさ。悩んでいたらしいけど、『主人の単身赴

任先について行くやうだ

そして・・・。

母と娘のダブルスコンビが復活した。イケメンコーチの肩の荷が下りた。

後味の悪さがしばらくクラブのコート間を漂っていた。

が、マダムたちのあくなき葛藤はその後も続き、いつの間にか風化していった。

## グラス10 御曹司店長の野望

「安倍店長と片桐主任で付き合い長いんですか？」

カフェの閉店後、お皿を厨房まで運びながら、思い切って私は片桐主任に聞いてみた。

珍しきご機嫌のようで鼻歌交じりに伝票を集計していたからだ。主任はレジから引き出した伝票をぐるぐる巻きながらちらと私を見て、「まあね」といつたきりまた視線を戻してしまった。

店長安倍とシェフハ嶋は早々と仕事を切り上げて、事務室のテレビにかじりついている。

まもなく始まる女子サッカーの世界大会観戦のためだ。

二人とも試合そのものよりも、プレイヤーに興味があるらしい。さつきからどの国の誰それがかわいいとか、ナイスペディとか、そんな話で盛り上がっている。

今日はお客様も少なく片付けも楽なため、私は一人で皿を洗い始めた。

「同期入社なんだよね」

主任がシンクに集めたふきんを洗いながらつぶやいた。

「はい？」

「御曹司とあたし、大学4年のとき本社の内定決定者の説明会で、初めて顔あわせたってわけ」

「そうだったんですねかあ、初耳です」

「もともと同期が少なかつたし、当時を知ってる人もほとんどないからね。今残つてるのはあたしと安倍店長、あとはあんたもよく知ってる本社の平川君くらいだよ」

「あの平川係長も・・・みんな仲よかつたんですねか？」

「まあ・・・ね、研修とか厳しかったから助け合つたりしたよ。でも入社したとたん、配属がばらばらになっちゃって。あたしは外回りの営業で、平川君は当時できただばかりのインターネット部門、そして御曹司はそれこそ毎月配置換えでいろんな部署をまわった挙句、一年もたたずに海外転勤」

「ヨーロッパのホテルやレストランで修行したつていう？」

「そうそれ。あいつ何も言わないから、みんなそれまで社長の息子だなんて知らなかつたのよ。御曹司だつてわかつたのは海外転勤が決まって送別会の時、初めて聞いた」

「それ以来御曹司つてよばれてるんですか？」

「まあね。でも親のコネで入つたといつてもあいつの場合、人一倍苦労したと思うよ。社長はまもなく会長に退くけど、あいつ次男坊だから、次期社長は長男にほぼ決まりだし」

「店長つてお兄さんがいらしたんですか」

「それも飛び切り優秀なエリートで社長の自慢の長男。それにひきかえ、あいつは不肖の次男つてわけ。だからかわいい子には旅をさせろとばかりにあいつをヨーロッパに飛ばしたまではよかつたけど、それが間違いのもどだつた」

「いつたい何があつたんですか？」「私は思わず身を乗り出した。

「確か渡欧して3年目だった。あいつがフランスにいるとき、現地の女性と大恋愛をした」

「異国での大恋愛だなんてロマンチックですね」「ひとごとながら胸が高鳴る。あの店長にも純愛時代があつたのだ。

「二人は本気で愛し合つて結婚の約束までしていたらしい。でも社長も奥様も皆大反対した。その女性、女優志望のダンサーだったんだ・・・結局御曹司はドイツに飛ばされた。当時名もない場末の踊り子に、彼の行方を知るすべもお金も無かつた。一人は引き離された」

「ほんとにそれきりになつてしまたんですか?」

異国を舞台にした悲しい恋物語が胸を突く。セピア色した映画の画像が浮かび、頭の中は妄想でいっぱいになつてきた。

「その後御曹司はベルギー、オーストリア、イギリスとヨーロッパ各地に飛ばされ、10数年が流れた。その間ずいぶんと手を尽くして彼女を探したらしい。そしてわかつたことはその後彼女は女優を諦め、平凡な結婚をしたらしいということだけ。それであいつもきつぱり諦めた。その後も御曹司の各国での修行は続き、ようやく昨年帰国した」

「なんて切ない恋物語なんでしょう」

「でも帰国してからのあいつ、以前の御曹司とはちょっと様子がかわつていた」

「失恋して別人になつたとか?」

「そこまで極端じゃないけど、なんか仕事に対する気迫が違うように思う。あたしさあ、今回この店に配属されて久々あいつにあつたんだけど、あいつこの店にかけてると思うよ。入社以来各地をたらいまわしされ、スキヤンダルを引き起こした拳句の帰国だからね、周囲の風当たりは強いし、当然あいつの本社でのポストは無い。そこで次期社長の長男の提案で、ヨーロッパビールのカフェバーの立ち上げにあいつが任命されたんだ」

「店長はこの店に本気で取り組んでいるところですね」

「まああいつも親や重役連中に対しての意地もあるからね」

今までいだいてきた店長安倍比呂入への偏見が急速に氷解して行く。

「そういうことなら私たちもがんばらなくちゃいけませんね」  
心のそこから闘志がみなぎってきた。

すると事務所から店長の声。

「オイ、お前たち、何でもいいからビールもつてこい」

相変わらずの尊大な言い方だが、さすがに長い付き合いだけあって片桐主任はあっさりと答えたものだ。

「了解、今すぐいいのを持つて行くから、待つてなよ御曹司」

そして主任片桐はまるで予測していたかのようにあらかじめ冷やしておいたビールを専用の冷蔵庫から取り出してきた。

ブレッジ ブロンズ フランスのビールだ。

事務所からシェフ矢嶋が出てきた。

「一人とも遅くまで」苦労をした。一緒に観戦しよう。

事務所では店長安倍が食い入るようにテレビを観ている。

「店長ひさしがカーに興味あつたんですね？」

「こやまつたべ無こ」

店長は受け取つたブレッシュ ブロンドをペリペリのじを鳴らしながら飲んだ。

シユツハ鳴が丘桐主任と私にもおなじホールをわたしてくれた。

「店長は試合でもここの」

「えへ、ビルここにひとですか？」

すると一瞬にフレッシュ ブロンドを飲み干した店長が画面に映る選手と瓶を見比べながらじみじみといった。

「ちへぱ／＼ロハゲはここだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1706v/>

---

「ようこそ欧洲麦酒カフェへ」

2011年10月9日07時51分発行